
暁に咲く華

霜月千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁に咲く華

【Nコード】

N6842Y

【作者名】

霜月千鶴

【あらすじ】

数年前、妖怪が人々を襲い、多くの人が死んだ。国は二度とその悲劇を起こさないように「狩人」の集団をつくる。だが、天宮風華と叶鷹斗は狩人でありながら、国の狩人集団に属していなかった。

ただ、お互いの目的のためだけに。
そんな二人に手を差し伸べたのは。

第一は「華と鷹」（前書き）

- ・この小説は一次創作です。実在する人物、団体、出来事等とは一切関係ございません。
- ・誹謗中傷等はお辞めください。

第一は「華と鷹」

未だ朝陽も昇りきらない頃、陽霧市ようぎりしという人口約二十万人、縦横三十キロメートルの市のはずれの森林、其処に十代半ばらしき少女が居た。

少女は濃い紫色の、傷一つ無いさらりとした長髪で、目は茶色と一般的な色でありながらその目から放たれる眼光は鋭く鋭利な刃物を想像させるが、肌は眼光とは逆に柔らかそうで、透き通るように白く、目鼻立ちはずっきりしており、凛々しさや凶暴さが見え隠れする整った顔だちだった。

ただし、動きやすそうな服の胸部は残念な程平らである。

少女の名を、天宮風華あまみやふうかと言った。

「逃がした」

風華は舌打ちする。

風華の手には、短刀ナイフが握られていた。

短刀の刃先からは、半透明の液体が滴り落ちている。

その半透明の液体が地を僅かに濡らし 半透明の液体が濡らした部分は、やがて溶けていった。

毒だ。

「鷹斗たかと！ そつちは!?!」

風華が居る其処よりさらに緑の深い場所に向かって、風華は叫ぶ。するとがっさがっさという音とともに、風華と同じ年齢らしき少年が姿を現した。

髪は黒茶色の短髪で外ハネしており、目は銀灰色と変わった色で恐怖を抱かせそうだが、目は眠たげなためさほど恐怖は無く、むしろ気だるげだが目鼻立ちはずっきりしており、肌は風華のように透き通るように白く、儂さのある人目を惹く程端正な顔だちをした少年だった。

だがその端正な顔だちを台無しにするように、黒シャツは盛大に

乱れており、ジーパンの所々に葉をくつつけている。

名を、叶鷹斗かのうたかとと言った。

こう言っつては失礼だが、彼の容姿から「鷹」は誰も想像出来ないであろう。

長年行動を共にしてきた、風華以外は。

鷹斗は首を大きく縦に振った。

「倒した」

鷹斗は草むらに手を突っ込んでそれを引っ張り出した。

がっさがっさがさあつと盛大に草が揺れ、血で赤く染まった鷹が出てくる。

否、ただの鷹では無い。

縦横一メートル以上はあり、足の爪も三十センチ程で刃先のように鋭く、翼に至っては羽一枚一枚が刃のように鋭く硬い。

このような通常の生物とは異なる者達を、妖怪と呼ぶ。

ただし、このようにわかりやすい者ばかりではなく、誰かの心の闇に妖怪が付け込んで、その誰かを操る場合もあるから要注意である。

数年前、人々をこの妖怪が襲った。

死者九百二十名、重傷者千五百五十名。

当然、国に大激震がはしった。

国は其処で一つの措置をとる。

狩人ハンター。

中には特殊能力を持つ者も居る。

風華と鷹斗も狩人ではあるが、他の狩人とは違う。

大抵の狩人は国の組織に入り、四人一組、多い時は六人一組で動く。

だが其処に個人の意思は関係ない。

それを嫌い、風華と鷹斗は手を組んだ。

風華は風華の目的のため、鷹斗は鷹斗の目的のために、狩人をしている。

そして、二人一組という一人対一人になることで、お互いのために自由に動くこともできる。

それに二人は幼馴染だったし、お互いのことはよく知っていた。国のため、顔も知らぬ誰かのためには頑張れない。

それが二人の共通点でもある。

風華はベルトからプラスチック製の注射器を取り出して、その妖怪の鷹の腹部に注射針を突き刺す。

みるみる内に、注射器の中に妖怪の鷹の血が溜まった。

「ほら鷹斗、腕出さない」

「此処で？」

「家帰るまでもたないでしょ」

鷹斗は腕をまくる。

風華は特に注射針を刺す場所も選ばず、鷹斗の肘と手首の中間辺りに突き刺した。

「……っ」

鷹斗が一瞬痛みに眉根を寄せる。

注射器の中の血が、鷹斗の体内へと流れ込んでいく。

四十秒もしない内に、注射器の中の血が無くなった。

風華はポケットに突っこんでいたコットンを取り出すと、注射針を刺している場所にあてつつ、注射針を引き抜いた。

「……もうちょっと丁寧にできない？」

「悪かったわね、雑で」

鷹斗はあいている方の手でコットンを押さえる。

鷹斗は特殊体質だ。

一日最低一回、妖怪の血を体内に取り入れなければ生きていけない。

最初から、ではなかった。

あの数年前の事件をきっかけに、鷹斗の体内の何かが狂ってそうなってしまったのだ。

「帰るわよ。学校があるし」

「うん」

鷹斗は頷き、そして横たわっている血塗れの鷹を見る。

「……鷹、^{これ}どうする？」

「放っておきなさいよ。何かの餌になって自然と滅びるって」

寒風が、風華の長髪を揺らす。

もう冬も近い。

でも、風華達は目的を果たすまで季節の行事には関わらないだろう。

「帰るわよ」

もう一度、風華は言った。

続く

第一は「華と鷹」（後書き）

（後書き）

初めまして、霜月千鶴です。

初シリアス？ファンタジー長編を書かせていただくので、ちょっと緊張しております。

初長編なので色々至らないところはあると思いますが、なにとぞ温かい目を見て、楽しんで頂ければ幸いです。
では。

この辺りで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6842y/>

暁に咲く華

2011年11月20日19時31分発行